



水  
花  
香  
譜  
二  
編  
終

ル 4  
328  
7



北越雪譜二編卷之四

目錄

○ 異獸

○ 弘智法印

○ 白鳥

○ 浮島

○ 美人

○ 苗場山

○ 鶴恩小報

通計十三條

○ 火浣布

○ 土中の舟

○ 兩頭の蛇

○ 石打明神

○ 蛾眉山下標準

○ 三四月の雪



呂 門  
328  
卷 7

雪譜二編卷下下是ヨリ四卷

廿三ヨリ

文溪堂藏



小機こけの上手ありて問屋より名をきくとちぎをわつらまじき  
 雪ゆきのまきえのとりする函はこのゆふ機こけを織あるゆふ函はこの外とふ立たるを  
 こまげ猿さるのやうありて顔かほ赤あかくうづかいらの毛け長ながくよまよ一人より大  
 ろるがさうのそまけり此時家内の者いさる山やまうせふいせむすり獨ひとり  
 あまびことさうふ悞あやまはとらき逃にげんとままご機こけふかりよんハ腰こしふまに  
 つける物ありて心こころふまうせまごころくまらうちうあものまきりたりかて  
 かまどのゆふ立たきまきりふ飯いひ櫃び指さして欲ほさるあり娘むすめ此こ異い獣じゆうの  
 事ことをうゆ聞きるゆふ飯いひを握にぎりてニツニツわさけまばうまこけけふ  
 持もたりけりちのち家いへふ人ひとあき時ときハをりく來きりて飯いひをむふゆ  
 後のちハ馴なれどをろくともむらむらるるるり○さて此こ娘むすめ 尊たうとん用ようありとて  
 急いそのちむをわりかけふ折せりふ月つき水みづふありとて 御ご機け屋やふ入いる事こと  
 あうづ 御ご機け屋やの事こと初はつ編あみ委いしく記しせり 手てを停とめ居ゐる日ひ限かぎふ後のち娘むすめハさうあり双ふた親おやも

此事このことを患うれひ歎なげきけり月つきやより三日さんじつふあつる日の夕ゆふま家いへ内のもの震ふる  
 業わざよりかつらざるをありてあやかゆもの久ながかりあきまきこまり娘むすめ人ひと  
 ものゆふごころ月つきやのうまひをかうつ栗くり飯いひをあまきりてあまふま  
 まいのごころまぶふ立たきまきりてゆふのあまふまきりてあまふま  
 けりさて娘むすめハ此こ夜よより月つきやをこまきりてゆふ不思議ふしぎとおもひあ  
 身をまきよめて御ご機け屋やを織あ果はるの父ちち問と屋や持も去さり往ゆ着きるとちふ入い頭かぶ  
 娘むすめ時ときあうづ俄いちに紅べに潮うしほふありてゆふまきりて我われガ歎なげきを聞きてかゆもの  
 我われを助たすけんと聞きく人ひとも不思議ふしぎのゆふひをありけりと語かたり  
 そのころハ山中やまなかあきたまさうふ見みるものもあり一人あても連つなる時ときハ  
 形かたちを見みせまるとぞ又また高たか田の藩はん士し材ざい用ようあり樵せう夫ふをままご黒くろ姫ひめ山やまふ入いり  
 小屋こやを作りて山やま小こ日ひをうつせり時とき猿さるふ似にて猿さるあもあうづる物もの夜よ中ちゆう  
 小屋こやふ入いりて焼や火ひふあきまきりたけハ六む尺せきをり赤あか髪かみ裸はだか身み通と身み灰はい

山中異獸の圖



三詩二編卷之十

文溪堂藏



秋月篝杖之葦

五世百二編卷之十

廿六

文溪堂藏

色あざも毛の脱る小似る腰より下小枯草をまふ此物より人のいふ  
ことふあざひひのちあざより人小馴しと高田の人のいふ按ふ和漢三  
支圖會寓類の部小飛驒美濃あひ西国の深山も如件異獸ある事  
をあるせりささづきの深山もあまのあざ

○火浣布

宝曆年中平賀鳩溪源内火浣布を創製し火浣布考を著し和漢の  
古書を引本朝未曾有の奇工小誇り没しそのち其術つらう好  
家の憾事と志あたる小我國嘗火浣布を作るの石を産まその在る所々  
○金城山。巻機山。苗場山。八海山その外もありその石軟弱しく爪を  
もつても犯さずき不ぞの軟者石ありいろ青く黒しこまをくらげけバ  
石綿を出し此石を得て試し小石中小在る石綿といふもの木綿とを  
細く袖するを三分やふちさうさうあるものあり是を紡績する小秘術

あり火浣布を造るあり其秘術を得バ小女子も火浣布を織るべし  
○さて我驛中小縮荷屋喜右門とのいふ石綿を紡績する事小千思  
万慮を費し竟小自その術を得て火浣布を織り又其頃我近  
村大澤村の医師黒田玄鶴も同く火浣布を織る術を得たり各々  
秘しその術を入小傳へざるふちなり時をり村つぎふておろし火浣  
布の奇工を得るも一奇事あり是文政四五年の間の事ありき此西  
人の説をききし小力をつく其文以上あるをも織るべし其機工容易  
ありとより平賀源内六織を五六尺小過むと火浣布考ふいへりま玄鶴が源  
内小まより事ハ玄鶴ハ火浣布の外小火浣紙火浣墨の二種を造  
りり火浣墨を以て火浣紙小物をき烈火小かけ火とありしを志  
くふとりいづし火氣さむま紙も字もそのごとくあるごとく其實用  
をいふ火浣布も火浣紙も火災の供ふ憑ぐつりいんともま火

遇ハ俱ハ火とあり人あり火中よりいさぎよく火と俱ハ碎けり形をじ  
るふたが灰とありざるのそあり觀具ハ用うる所なきありあり源内  
死し奇術絶なり小件の兩人の火浣布の機術再世ふいせし  
嗚呼可惜此兩人の術をつとむるは後世に火浣布をふせむ世ハ絶  
りりかの源内ハ江戸の饒地ハ火浣布を織りて其聞え高くあり  
兩人ハ越後の辟境ハ火浣布を織りて其名低りて其ふらふあり  
〜〜好事家の一話ハ供す

○弘智法印

弘智法印ハ見玉氏下総国山素村の人あり高野山ふあり〜密教を  
学ビ後生国ハ飯り大浦の蓮花寺ハ住り行脚し越後ハ來り三  
嶋郡野積村里言海雲山西生寺の東岩坂とのハ所ハ錫をとり草  
庵をむむび〜貞治二年癸卯十月二日此庵ハ寂せり辞世とす

口碑ハつとる哥ハ「岩坂の主を誰ぞと人間を墨繪ハ書〜松風の音  
遺言あり〜死骸を不埋今天保九をさる事四百七十七年ハいこ  
り〜枯骸生るか如〜是を越後廿四寺のハ一ハ数ハ此事雜書ハ  
散見ハとむも圖をのせりものハ〜也ハ圖をさふい〜此圖  
ハ余先年下越後ハあそび〜時目撃ハたる所あり見所ハ面  
部ハ手足ハ見えど寺法あり〜とて近く觀る事をゆるさハ閉眼  
皺あり〜眠り〜如〜頭巾法衣ハむじのま〜あ〜る〜  
是世國ハ聞き越後ハ一奇跡あり

百樹曰唐土ハ弘智ハ似ハる事あり唐の世の僧義存没〜  
のハ尸を函中ハ置毎月其徒ハをい〜ハ髮の長ハるを剪  
薙常〜ハ百餘年を経〜ハ廢せ〜ハ後國の〜ハ  
因〜ハ火葬せ〜ハと〜ハ宋人彭乘ハ作墨客揮犀ハ





や長く鳴音も鳥小異ありて我が近隣ありて朝夕こゝを觀す  
 奇鳥ありて人も多く江戸へ出でて觀物小せんありて一も有る  
 主人をいへるさびかく其冬雪中ふりて山の龜狢を餌小く  
 人家小きてりて食をねむ事雪中の常ありて此の所為ふや  
 白鳥の羽をり椽の下小ありとて初編ふ白熊の事を載  
 たるゆゑ白鳥もまゝこゝ小記しぬ

○兩頭の蛇

文政十年庚の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端  
 小兩頭の蛇いてるを捕ふ長さ一尺ふたつをての頭二つ並びて枝を  
 のりりもかゝらも常の蛇ふらふをあるふまうせと古き箱ふしと餌も  
 小二三日をまゝてりて逃げまゝやあつてをたづぬとてを  
 ざりりとぞ

○浮嶋

小千谷より西一里小芳谷村といふありて小郡殿の池とて四方三町斗  
 の池ありて浮嶋十三あり晴天風ある時日出て十三の小嶋おの  
 離散して池中小遊ぶ如く日入ると池の正中小あつまりて一ツの嶋とある  
 此池小種くの奇異ありて文多けきとて羽州の浮嶋ハハの事記  
 して人の知る処あると此うきまははる人まゝあり

○石打明神

小千谷の内農人某の地面小社あり石打明神といふ昔より祀る処也  
 その縁起ハ聞ひしり贅肉あるもの此神をのり小石をりてのやを  
 撫社の椽の下小箇子の内へ投りておく小日あつてとて人の事  
 奇妙ありさるるげらとて小石の形ありともいふとて人の圓也  
 なるごとく圓石とあるも又奇妙ありとてありさるる社のえんの下小大小の

圓石満ちらりり ○百樹曰余も小千谷小遊び一時此石を視て話柄小  
 一ッ持帰んとせし小所の人ゆりや此神是石を惜み玉をとりひつてふと  
 ききて取らるをゆりゆの処へつてつて視る小数万の石人の磨り  
 する玉のごとく凡神妙ハ肉知を以て測りてぞ

○美人

百樹曰小千谷の因ふゆ余小千谷の岩居が家小旅宿せし時天保七  
 或日筆を採小倦山水の秋景を觀むやとて獨歩ゆり小千谷の前  
 小流より川小臨岡小のゆり用意する書をく毛纏を老樹の下小  
 志き烟らゆせつ眺望ハ引舟ハ浪小遊りてうごごるが如く下る  
 舟ハ流小順ふり飛小似たり行雁字をるる歸樵画をひく  
 群木ハ少く霜を染る紅く連山ハ僅小雪を載る白く寒  
 国の秋景江戸の眼を新小なりし絶を得るごとく

むらりあめをりりも十六七の娘三人あけ柴籠をせむ山  
 をのりてふかきふかき火をかきまき煙管さしよせする顔を  
 山水小目を奪ひてふ火をかきまき煙管さしよせする顔を  
 見ま蓬髪素面あて天質の艶色花ともゆり玉も比を  
 百結の鶉衣此趙壁を羅む余愕然し山水を棄て此娘を視る小  
 一揮し去り樹の下草小坐してあをあげてきせるの火を  
 うつしむをり三人ひと吹烟双無塩獨の西施と語るハ蒹葭  
 玉樹小よりが如く皓齒燦爛とてしら白芙蓉の水をいで  
 微風小揺がごとく嗟乎惜哉かき美人も是邊鄙小生也昏  
 庸頑夫の妻とあり巧妻常小拙夫小伴とて眠り荆棘と俱小  
 腐らん事憐不堪たり若江戸小いづる朱門小解語の花を閑  
 あらハ又清樓小揺泉樹の栄をり此隣國出羽小生とて

小野の小町が如く美人の名をもあまきこふ此美人を此僻地不出  
 ず八天公事を解きさふ似たりと猶歎息しつと言んとあふ娘ハ  
 去來とくあふび柴箆をせおひらちつとく立さりけり目送る  
 願越後女美人多しと人の口實ふりまらうべかり是無他より水  
 小よるゆゑありささる織物の清白なる越後の白縮小勝とて  
 ありことささる此邊ハ白縮を産する所あり以て其水の至清なる  
 をあまづ江河潔清ある女小佳麗多しと謝肇淵がひひも  
 理ありとあまひつゝ旅宿小帰り云々の事あり美人を視たりと岩  
 居小語りけは岩居のやう渠ハ人の知る美女あり先生を他國の  
 人と眼解欺きたをこの火を借するん可憎と舌くみむづらう  
 吾たむの火を借て美人ふらん縁をむむびと戯言けは岩居  
 手を拍り大に笑ひ先生誤りうと六磨者の娘ありと聞くと再び

愕然たり糞壤妖花を出せとあかざる事ありひひらうるべし  
 ○再按小野の小町ハ羽州の郡司小笠の良實の女あり楊貴妃ハ  
 蜀州の司戸元玉が女あり和漢俱ハ北國の田舎娘せ小美人の名を  
 つくふ北方小佳人ありといひも北ハ陰位あり女小美麗を出せ  
 めやあらん二代目の高尾ハ御野州小生と初代の薄雲ハ信州小産人  
 と小北廓小名をあせりささる越後小件の美人を見し北國  
 あまきこふ

○蛾眉山下橋柱

文政八年乙酉十二月新羽郡越後椎谷の漁人椎谷ハ堀後のあの日椎谷の  
 海上小漁一木の流し漂ふを見て薪小せをやと拾ひ取て家小  
 くの水を乾さんと尻小立寄むを椎谷の好事家通りかり是を  
 見たりぬ木とあまひ熱視小蛾眉山ハ山下喬とあま五大字刻あり

しをりつゝかの国の物とわひの漁人ぬら薪を与へてをひらけきるとぞ  
 さて余が旧友觀劬上人推谷の田沢村強学の聞えあり嘗て好事の癖  
 あるを以てかの橋柱の文字を双鈎刊刻して同好なり且橋柱小題  
 たる吟詠をといひ是も又梓ふして世に布んとせしむるが故ありとて  
 不果うの橋柱の後小御領主の御藏とありとて推谷に余が同国を  
 とも幾里を隔てて其真物を不見今小遺憾とて姑傳寫の圖を  
 以てて小載つ。百樹曰牧之翁が此草稿のせしむる圖を見ふ少くもあり所有  
 百樹曰了阿上人が和哥の友相場氏の推谷侯の殿人とききて上人  
 の紹介をりつゝ相場氏小對面して件の橋柱の事を尋ひし  
 余小謂し橋柱ぬらぬ標準ありとて俗小書翰帛といふ物  
 小作りしるを出し其圖を示さる余が友の画人千春子が真  
 物を傍小しる縮圖あり娥眉山下齋といふ五字ハ相場氏

つゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深め  
 左り小願せその下小五字を彫つけハ是より左り娥眉山下  
 橋ありと人小をりつゝ標準ありとてつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深め  
 渙然今俗小指をつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深め  
 つるを問する事あり和漢の俗情あり事あり。さて此標  
 準を得る實事をまゝし北海ハつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深め  
 北風烈一碇一物をうちよる推谷ハたきものふとがり一き所  
 ゆゑ貧民拾ひ取りし薪とるを事常ありとるふ文政八酉の  
 十二月例の如く薪を拾ひ小出し小物ありし柱のごとく浪小漂ふ  
 をまゝ人の頭とる物あり甚兇惡あり貧民等懼しつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深め  
 さりものつげより見居る小此の一竟小碇一ふらちあげしつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深め  
 見る人々下りりなる小文字ハあもつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深めつゝ心を深め

みんとさめぐ評し居るをりも近き西禅院の童僧  
 通りかり唐詩選ゆきわゆる蛾眉山の文字を讀こも唐土の  
 物ありとききて貧民拾ひて持くりさきふ唐土の物とききて新ゆめ  
 せざりし此事開傳しき竟ふ主君の藏とありしと語るとき  
 ○按る小蛾眉山ハ唐土の北不在る峻岳也富士もくふべき高山  
 あり絶頂の峯双立く八字をあらまゆ蛾眉山といふあり此山の  
 標準日本の北海へあがるときりたる其水路を詳究せんといへ唐土  
 歷代州郡沿革地圖小扱へ清国の道程圖中を檢する小蛾眉山  
 ハ清朝の都を距こと日本道四百里許の北不在り此山小遠くは  
 一條の大河東へ流蛾眉山の麓の河く皆此大河小入る此大河  
 瀘州を流し三峽のふりこを過ぎ江漢小至り荊州小入り洞庭湖  
 赤壁。潯陽江。揚子江の四大江小通しへ江南を流酒りへ東海

小入る是水路日本道五百里をりありきて件の標準洪水ゆくや  
 水小入りけん。洞庭。赤壁。潯陽。揚子の海の如き四大江を蕩漾周  
 流し朽沈む溜くゆる水路五百餘里を流し東海小入り巨濤小  
 千倒し風波小万顛をまじり断折碎粉せを直身挺然とく我  
 国の洋中漂ひ北海の地方小近より推谷の貧民小拾とく始く  
 水を辞し既小一燼の薪とあるべきを幸小字を識者小遇ひて死灰を  
 のがし韻客の為小題咏の美言をうけけるのそありん竟みふ  
 推谷侯の愛を奉し身を宝庫小安んじ万古不朽の洪福を  
 保つて変奇妙不思議の天幸ありし實小稀世の珍物あり  
 縮圖左のじと  
 丈一丈餘 闊二尺五寸餘 木質弁名へく守



蛾眉山下齋

登苗場山之図

霄間清露湿衣中  
衰際平蕪四望秋  
呼吸極か通帝座  
徘徊却愧问天人

吐息毛雲とや  
かゝる舞客の秋  
秋序尾牧之





憇やすむてもこのけりて神樂岡かみらぎとの所ところふりまじりことより他木ほかぎさうふ  
 ろく俗ひん小唐松こからまつとの所の風かぜふたけをのぞきまじり楢ももハ雪霜ゆきしもあや枯かされん  
 低ひき森もりをりてさかこふありまこのけり少すくく御花圃ごはなぼとの  
 所ところ山やま様盛さかひき百合はくげ桔梗ききやう石竹いしちくの花はなあまのさぬ人の植う中ちゆうあひふ似にり  
 名なをまじりまじり異い草くさあまこあり案内者案内者小問こもんハ薬草やくそうありとのけりまじり  
 のけりあまじりなみ棧せき崎さきある道みちふあがり岩いわふとつき竹たけの根ねを力草ちからくさと  
 一歩いっぽふ一声いっせいを発はつしつ氣きを張り汗あせをまじり千辛万苦せんじんばんくのけりて  
 馬うまの背せとの所ところふりる左右さうぶハ千丈せんぢやうの谷やありあま所ところ僅わずかハ二三尺にさんせき一脚いっあしをあや  
 まの時の身みを粉こな碎くだふるまじりなみ忙あせ怕おそあまてなみ竟つひ不絶頂ふつせつていふのけりまじり  
 ○諸しよ同行どうぎやう十二人じふににんまじり草くさふ坐まして憇やすむふ時とき已なほ下くだ晡ふありまじり案内者案内者の  
 のけりハ登のぼり二里にりの險道けんぢやうあまじり一日いちにちふ往來わうらいまじりことあまじり絶頂つせつてい小こ屋や在あ  
 らふのけり人ひと必かならずその小屋こやふ一宿いしゆくまじり事ことありとのけり今いまその小屋こやをまじり

木の枝えだ山やまき枯草かぐさあま取りあつらふらうなみ匍匐ほふふく入いるむらり小作りこぞりた  
 らハ野の非人ひにんのをまじりまじりあまのけり今いま夜のやどりふさまじりまじりまじり  
 まじり笑わらふ僕わがまじり枯枝かぐしをひらひ石いしをあつらふ假かり小灶こゝろをまじりまじり  
 食物じきぶつを調しらせんまじりあまのけり水みづをたぐひて茶ちやを煮ひまじり上戸かみどハ酒さけの烟えんをいそ  
 をまじり肥い魚いそ越後えちごまじり浅間あさまの洞ほらをまじり信濃しんのうの連山れんざんまじり眼がん下くだハ波濤はたうを千隈ちか  
 川がはハ白しろき糸いとをひき佐渡さつハ青あおき盆石ぼんせきをまじり能登のうでの洲崎すさきハ蛾眉かみまゆをまじり越前えちぜん  
 の遠山とんざんハ青黛せいだいをのぞりて小眼こがんを拭ぬぐひ杖ふえ兼かね第一だいいちの富士ふじを視みひまじりその  
 まじり雪ゆきの一握ひとわきりを置おかかまじり人ひとハ手を拍う奇きありと呼よび妙たぎありと称讚しょうさんを千  
 勝あきつ万景ばんけい應接おうげつまじり小遑こていあまじり雲脚うんあし下くだ小起こたまじりまじり忽たち晴はる日光眼にっかがんを  
 射やる身みハ天外てんがいハ在あり如ごとく是こゝ絶頂つせつていハ周一里しゅういちりとのみ莽まう々々たる平芜へいぶ高抵たかぢの所  
 を不見山ふけんざんの名なふまじり苗場なへばとの所ところふりてさかありそのさぬ人のけり  
 たる田のの如ごとく中人ちゆうじんの植うまじり苗なへふ似にる草生くさせいひまじり苗代なへしろを半はんまじり

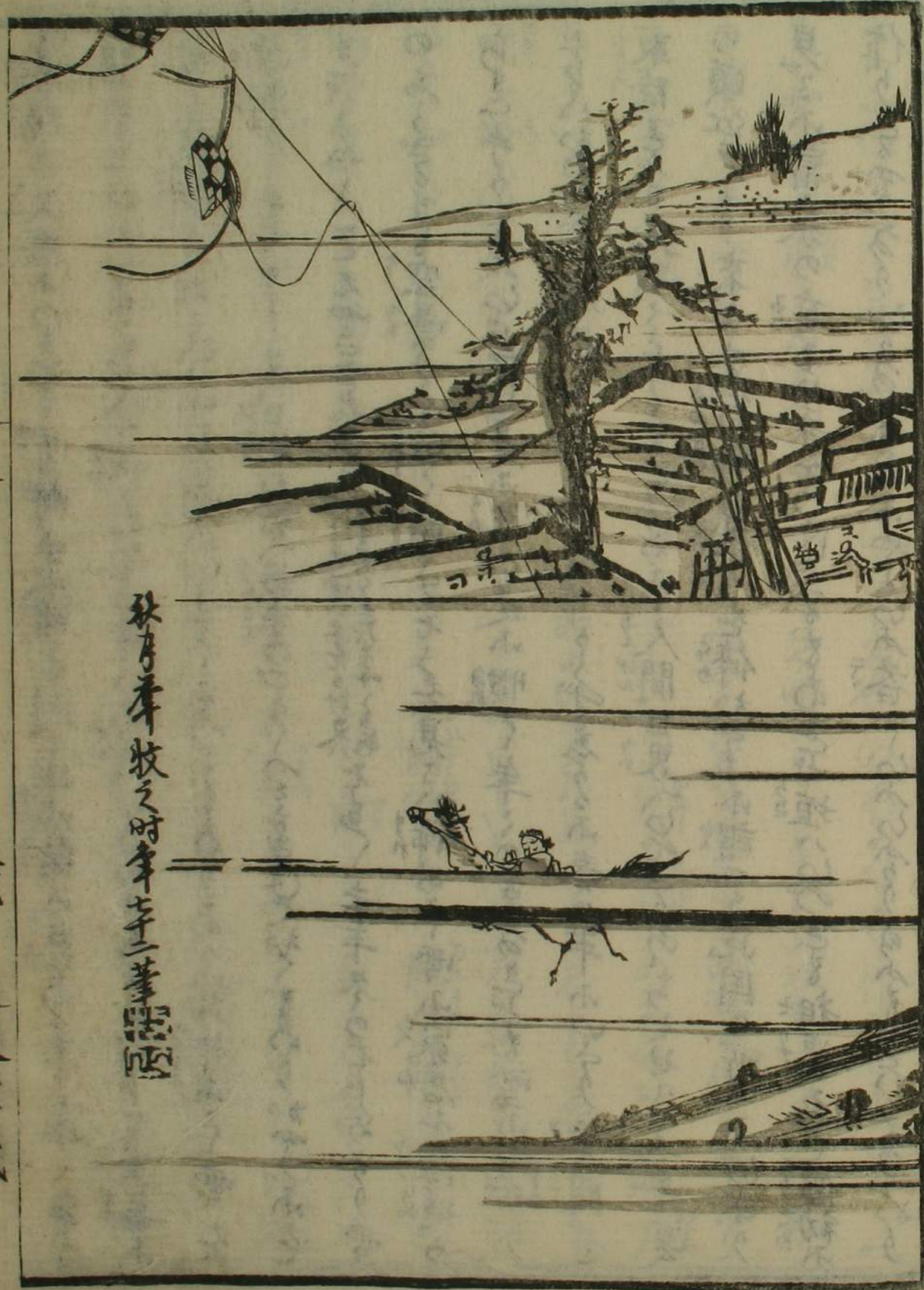


のりーるやうなる所をありてを奇ありとむふ此田の中蛙島又虫も  
 ありて常の田を事な又いふる日やも田水枯きま二里の巔ふ此奇跡を觀ること  
 甚不思議の天山あり案内者いひ御花園より別小徑ありて竜  
 岩窟といふ所あり窟の内ふ一條の清水ありてそのやうふ古錢多く野口ニツ  
 掛りありて神を祀るむりより如斯といひつるものなり今草木ふ塞ま  
 してまゝありてとり絶頂あり石刻して苗場大権現とあり案内者ハ此石  
 人作ありて天然の物といひ俗傳をぞと見ゆがち日まをま小屋赤内りハ  
 挑燈をさげとありて外ふ火を焼くふてび食をさるのいひて酒を  
 酌六日の月皎くとてしと空もちりたやうゆ桂の枝もをさるちりり  
 人々詩を賦し奇をよむ俳句の吟興もありてや時をうりたるや寒  
 気次第小烈しと用意の綿入ふも志のゆるて終夜焼火ふありて夢も  
 むらむをさるのりめつとらまらむふふをさるなりたむらむや御來迎を拜

たすふと案内がいふふまうせ拜所いり日の昇を拜しとてくして山  
 をふふり別小徑行ありて大○百樹曰余越遊し言時牧之老人ふ此山の地勢  
 を委しとまう真景の圖をも視るふ巔の平坦なる苗場の奇異竜岩  
 窟の古跡ある水あり自在の山ありては上古人ありて此山をひりて  
 絶頂を平坦あり馬の背の天險をたのむて住居し耕作をそ  
 してふらふびそら其天魂をふとまうて苗場の奇異をもるふやと思り  
 国史を捜究せば其徴をも得るや博達の説を聞ん

○三四月の雪

我国冬ふささあり春ふありても二月頃まで六兩降る事あり雪のふるゆゑ  
 あるが春の半ふささ小雨ふる日あり此時ふささ晴天ハもとより雨  
 あり風あり去来より積雪をさる小消るありささとも家居あり乾る  
 北東あつる方ハささ事あり山々の雪ハ里地よりさささるまわてけとふも



秋月奉牧之時年幸三筆墨画



市中四月雪解圖

雪詩二編卷之六

文海堂



○鶴恩小報也

天保七年丙申の春我々郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎俳号を  
二松といふもの高みの為西國ふりて或城下小逗苗の間旅宿の主がそを  
一此近在の農人のとが田地のうち小病鶴ありて死ふいふんとするを  
見つけ貯る人參めく鶴の病を養へ小日あつて病癒て飛去りけり  
さて翌年の十月鶴二羽かの農人が家の庭ちり舞ふり稲二莖を落  
し一声づ鳴て飛さりけり主人拾ひとりて見るふその丈六尺小あまり穂  
も是ふつと長く穂の一枝小稲四五粒あり主人あつて去年の  
病鶴恩小報んといふ異国より啞えきりてあんな何あもあまじとめづ  
りしき稲ありとて領主小奉りけり小志をうくとめあまじのちその  
まゝ主ふなをりりよく中あつておせふよりとて苗のころふりて心をつて  
植つけり小鶴があまふらうとせよく生ひにけり國の守りも奉り

一とうとより東五郎猶その村その人をとも尋きけり鶴を助けし人  
東五郎が縮を賣する家あつてあまその家ふりて猶委く聞てさて國の土  
産小せん穀を一二粒賜はせりといふはあつて越後ハ米のよき國とせば  
ことさう小生ひあんといふも五六十粒とて一斗を國へ持りて事の来由をヤて  
邦君小奉りて御城内小植し玉ひ東五郎へ御褒賞あど在りと  
小千谷の人その頃物がまじりあつて小余がごとく賤農もかゝるめい  
御代小生息とてとを安居しんか筆も採あつてさう千年の昌平を  
いのり鶴の話小筆をとめりつ猶雪の奇談他事の珍説あつて漏  
るるも最多けり生産の暇あつて編を編べり

通巻画圖 京水 岩瀬百鶴筆



北越雪譜二編四卷大尾

京山人百樹翁著述目錄

○和漢印章考 五卷

本朝古印の模本を圖し制度用格を弁む考證漢印小辨を以て和漢と目せしむる朱象賢が印典の作格小做ふ

○食物沿革考 五卷

昔の食物と今の食物の沿革を弁し食器の古圖ありしを諸書を引て考をまゐる

○和漢押字考 三卷

俗小書判といふもの起原をまゐりかきとんの作りやうを論弁せり

○骨董集三編 卷二 四編 卷二 醒齋京傳先生遺稿京山翁增修

○女粧考 前後 六卷

○芭蕉年譜 三卷 芭蕉一代の始終をまゐる

○高尾考 同 万治の高尾白刃不死といふ妄説を論弁し高尾十一代の傳遺墨遺器をまゐる

○茶の湯初心抄 同 茶の湯を字する人此書をまゐるが大槩をまゐり茶席小つらりても恥をまゐる心得をまゐる

東京神田區神田雉子町  
三十壹番地

書肆 寛裕舎

各 書 林

三十卷  
東京縣田園部田園子部

卷

第

三

三

